

中国の小学校体育の制度と実態に関する研究

～日中比較をとおして～

李婧

丸山富雄

キーワード：学校体育、学習指導要領、日中比較

The research about Chinese primary school's System and Status quo

—Comparison of Japan and China—

Li Jing and Maruyama Tomio

Abstract

The purpose of this study is getting to know Chinese children current situation in sports and PE class and comparison of Japan and China's physical education's textbook and system. The study includes 550 students in Shanghai and Xinyu's primary and middle school in March of 2015. The research was about "how was the attitude about PE class (for example: Like or Don't like), "Join PE class' desire", "Playing's status quo" and so on. The study also compares modern city and normal city's children status quo in sports and PE class. Finally, the Comparison of Japan and China's physical education curriculum systems provides a framework for further development.

So from the status quo and comparison of Japanese and Chinese physical education's curriculum system I can get the information to give advices and help Chinese physical education's curriculum system improve in the future.

According to the results of the study, physical education's curriculum system is similar in Japan and China. To Chinese physical education's curriculum, it seems positive for Chinese children and PE class to seek further development. In fact, the difference between classroom desires and Status quo is too great. Especially Chinese normal city are developing slow. So from the research and study to Chinese physical education's curriculum systems there are many places need improve and change.

Key Words: Physical Education, System, Curriculum, Comparison

第1章 序論

中国では改革開放政策以降、学校教育や学校体育において様々な改革を行ってきた。しかし、現実にはその改革も未だ発展途上といえる状況であり、日本に比べ、まだまだ遅れや不足した面が多々あると考えられる。

そこで本研究では、まず制度としての学校体育、特に小学校体育の日中比較を行い、その違いを明らかにする。その際、日中両国の最近の指導要領である日本の《小学校学習指導要領》(2008年)と、中国の《義務教育体育与健康課程標準》(2011年)を中心に比較を行う。次に中国の子ども達の生活や運動の実態と意識を調査した。筆者の経験から、中国では小学校体育も制度としては整えられたが、実際の授業は地域や各学校によって、その重視度も大きく異なる。特に教師の指導力や体育施設、備品の都鄙間の格差は非常に大きい。そこで都市部である上海市と地方の小都市である新余市の小学生および中学生の実態を調査し、都鄙間および小中学生間の違いを比較、分析する。このような子ども達の実態を分析することで、現在の中国の小学校体育の問題点も明らかになると考える。

本研究は、制度と子ども達の実態の両面から、中国の学校体育の現状を把握し、今後の中国の学校教育、学校体育の発展のための基礎的データと示唆を提供するものであり、社会的な貢献や実践的な意義を有していると考えられる。

第2章 日中両国の小学校体育の比較

先行研究および日本の学習指導要領、中国の課程標準から、小学校体育の日中間の制度的な比較を行った。

その結果、日中両国の指導要領の比較から、中国の課程標準には、生涯スポーツの表記や内容の具体性など、日本より歴史的に

遅れていたり、もう少し具体的な記述も必要な箇所も読み取れた。しかし中国の課程標準も、その制定の理念や目標、授業内容などは中国の現状に適応しており、今後の社会の発展のために求められることとも合致していると考えられる。紙上で美辞麗句を並べることではなく、子どもや学校の実際の状況と結びつけ、子ども達の成長と発展のために、今後も、社会情勢にあった迅速かつ生涯学習や生涯スポーツという将来を見越した改革が必要である。

第3章 中国の子ども達の実態

1. 研究方法：

中国の都市（上海市）および地方（新余市：上海市から南へ915kmにあり、2013年の人口は115.56万人の地方都市）の小学5年生、中学2年生に対しアンケート調査を行った。

- 1) 調査時間：2015年3月
- 2) 調査対象：上海市内小学生 200人
新余市内小学生 100人
上海市内中学生 200人
新余市内中学生 100人
計 600人。

3) 回収数(率):550 (91.6%)

4) 調査内容：

体育授業の好嫌度と種目および参加意欲、勉強とテレビ視聴時間、外遊びなど

5) 分析方法

データはSPSSで処理し、①男女別の小中学生比較、②小中学生別の都鄙間比較のクロス集計で分析し、 χ^2 検定により検定を行った。

2. 調査の結果と考察

1) 体育授業の好嫌度と種目および参加意欲

(1) 体育の好嫌度

①小中学生の比較

表1-1

	とても好き	まあまあ	あまり好きではない	嫌い	計
小学校(男)	101	36	1	0	138
	73.2%	26.1%	0.7%	0.0%	100.0%
中学校(男)	50	66	7	7	130
	38.5%	50.8%	5.4%	5.4%	100.0%
計	151	102	8	7	268
	56.3%	38.1%	3.0%	2.6%	100.0%

P<0.001

表1-2

	とても好き	まあまあ	あまり好きではない	嫌い	計
小学校(女)	94	56	3	0	153
	61.4%	36.6%	2.0%	0.0%	100.0%
中学校(女)	33	77	10	9	129
	25.6%	59.7%	7.8%	7.0%	100.0%
計	127	133	13	9	282
	45.0%	47.2%	4.6%	3.2%	100.0%

P<0.001

体育の好嫌度に関しては、この表から、小学校から中学校への比較を見ると、男女とも「とても好き」が小学校時よりも極端に低くなり、男女ともに統計的に大きな差(0.1%)がみられた。

②都鄙間の比較

表2-1

	とても好き	まあまあ	あまり好きではない	計
地方(小学校)	47	50	3	100
	47.0%	50.0%	3.0%	100.0%
都市(小学校)	148	42	1	191
	77.5%	22.0%	0.5%	100.0%
計	195	92	4	291
	67.0%	31.6%	1.4%	100.0%

P<0.01

表2-2

	とても好き	まあまあ	あまり好きではない	嫌い	計
地方(中学校)	35	56	5	2	98
	35.7%	57.1%	5.1%	2.0%	100.0%
都市(中学校)	48	87	12	14	161
	29.8%	54.0%	7.5%	8.7%	100.0%
計	83	143	17	16	259
	32.0%	55.2%	6.6%	6.2%	100.0%

体育の好嫌度に関して都鄙間で比較すると、小学生では都市の子どもの方が「とても好き」が非常に高く、地方の小学校よりも30ポイントの差があり、1%の有意差がみられた。

この要因は、小学生から中学生への減少は思春期を迎えた身体的な状況、勉強や受験に対するプレッシャーが、また小学生の都鄙間の違いは体育授業の運営方法など様々な原因が考えられる。

(2) 体育授業の嫌いな理由

前問で「あまり好きではない」「嫌い」と回答した子どもに、体育授業の嫌いな理由を尋ねたが、全員が「体を動かすことが好きでないため」の回答であった。

(3) 授業への参加意欲

①小中学生の比較

表3-1

	一生懸命	ときどき	あまりまじめに参加ではない	計
小学校(男)	100	37	1	138
	72.5%	26.8%	0.7%	100.0%
中学校(男)	55	72	3	130
	42.3%	55.4%	2.3%	100.0%
計	155	109	4	268
	57.8%	40.7%	1.5%	100.0%

P<0.001

表3-2

	一生懸命	ときどき	計
小学校(女)	117	36	153
	76.5%	23.5%	100.0%
中学校(女)	51	78	129
	39.5%	60.5%	100.0%
計	168	114	282
	59.6%	40.4%	100.0%

P<0.001

小中学校の比較では体育授業への参加意欲に関しては、「一生懸命」が、男子では72.5%から42.3%へ、女子は76.5%から39.5%へとともに25ポイント以上減少しており、参加意欲は非常に低くなっている。統計的にも大きな差(0.1%)が現れた。

②都鄙間の比較

表4-1

	一生懸命	ときどき	あまりまじめに参加ではない	計
地方 (小学校)	62	38	0	100
	62.0%	38.0%	0.0%	100.0%
都市 (小学校)	155	35	1	191
	81.2%	18.3%	0.5%	100.0%
計	217	73	1	291
	74.6%	25.1%	0.3%	100.0%

P<0.01

表4-2

	一生懸命	ときどき	あまりまじめに参加ではない	計
地方 (中学校)	31	67	0	98
	31.6%	68.4%	0.0%	100.0%
都市 (中学校)	75	83	3	161
	46.6%	51.6%	1.9%	100.0%
計	106	150	3	259
	40.9%	57.9%	1.2%	100.0%

P<0.05

小中学校別に見ると、小中学校ともに都市の方が参加意欲は高く、小学校の場合は1%、中学校では5%レベルの有意差が見られた。

この結果の要因は、体育の好嫌度と同様の原因、また都市部の学校の体育授業を取り巻く様々な環境（施設や用具、教師の能力など）が地方よりも優れていることも考えられる。

2) 勉強とテレビ視聴時間

(1) 勉強時間とテレビ視聴時間

①小中学生の比較

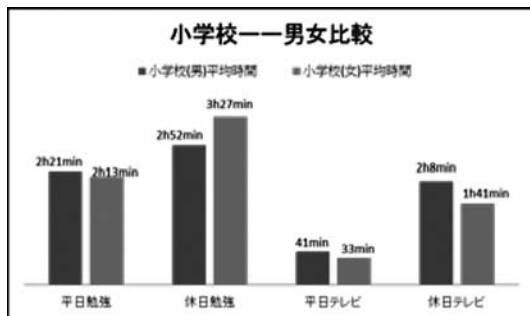


図1-1

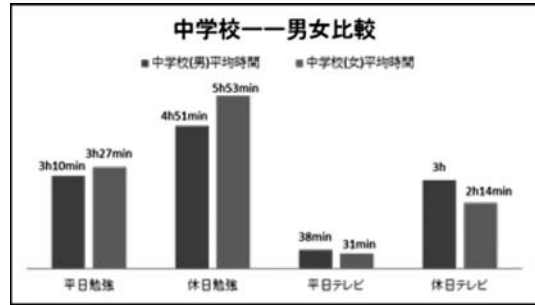


図1-2

家での勉強時間とテレビの視聴時間に関しては、日本のベネッセによる調査結果がある。それによると、日本の小学校5年生の平日勉強時間（2014年）は1時間26分、平日のテレビ視聴時間（2013年）は1時間12分である。また中学2年生の平日勉強時間（2014年）は1時間25分、平日テレビ視聴時間（2013年）は1時間29分である。日本の小中学生と比較すると、中国の子ども達は勉強時間では小学生で約30分長く、中学生では日本の約2倍もの多くの時間勉強していることになる。一方、テレビの視聴時間は、中国の子どもは日本の子どもの約半分の時間となり、中国の子ども達の勉強漬けが分かる。

②都鄙間比較

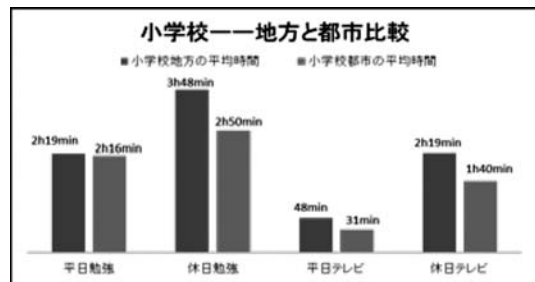


図2-1

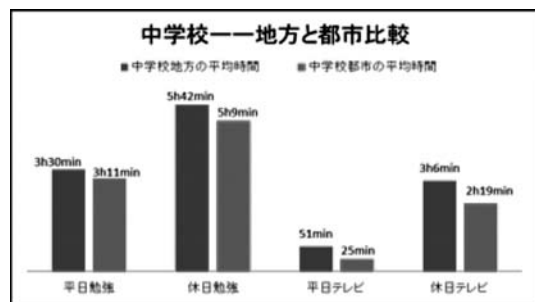


図2-2

勉強時間の都鄙間比較では、小中学生とも平日の勉強時間はあまり差がなかった。しかし、休日の勉強時間では地方の子どもは都市の子どもよりも1時間くらい多く勉強している。またテレビの視聴時間では、平日、休日ともに地方の子どものほうが若干多かった。

(2) 勉強に対するプレッシャー

①小中学生の比較

表5-1

	非常にある	少しある	あまりない	まったくない	計
小学校(男)	6	68	37	27	138
	4.3%	49.3%	26.8%	19.6%	100.0%
中学校(男)	25	78	20	7	130
	19.2%	60.0%	15.4%	5.4%	100.0%
計	31	146	57	34	268
	11.6%	54.5%	21.3%	12.7%	100.0%

P<0.001

表5-2

	非常にある	少しある	あまりない	まったくない	計
小学校(女)	9	63	47	34	153
	5.9%	41.2%	30.7%	22.2%	100.0%
中学校(女)	23	86	14	6	129
	17.8%	66.7%	10.9%	4.7%	100.0%
計	32	149	61	40	282
	11.3%	52.8%	21.6%	14.2%	100.0%

P<0.001

男女の比較に関しては、「非常にある」は小学校(4.3%から5.9%)、中学校(17.8%から19.2%)とともに、ほとんど差はなかった。しかし小学生から中学生になり、勉強へのプレッシャーは高くなり、男女ともに0.1%の有意な差がみられた。

②都鄙間比較

表6-1

	非常にある	少しある	あまりない	まったくない	計
地方(小学校)	7	60	20	13	100
	7.0%	60.0%	20.0%	13.0%	100.0%
都市(小学校)	8	71	64	48	191
	4.2%	37.2%	33.5%	25.1%	100.0%
計	15	131	84	61	291
	5.2%	45.0%	28.9%	21.0%	100.0%

P<0.01

表6-2

	非常にある	少しある	あまりない	まったくない	計
地方(中学校)	16	73	7	2	98
	16.3%	74.5%	7.1%	2.0%	100.0%
都市(中学校)	32	91	27	11	161
	19.9%	56.5%	16.8%	6.8%	100.0%
計	48	164	34	13	259
	18.5%	63.3%	13.1%	5.0%	100.0%

P<0.05

学校種別の都鄙間の比較では、小学生は「非常にある」と「少しある」を加えると地方では67%、都市で41.4%と、地方のほうが高い。同様に中学生の場合にも、地方は90.8%、都市は76.4%であり、地方の生徒のほうが勉強のプレッシャーを多く感じている。それぞれ1%、5%で有意差がみられた。勉強に対するプレッシャーに関しては、当然のことであるが、小学生よりも中学生のほうが強く感じている。しかし都鄙間の比較から、小中学生ともに地方の子どもの方がプレッシャーを強く感じていることが分かる。その要因には、中国では地方の子どもが都市の学校に入るためには、受験でより高い点数をとる必要がある。そのため将来の受験のため、勉強に対するプレッシャーは地方の子ども達のほうが強く感じているようである。

(3) 外遊びの意欲

①小中学生の比較

表7-1

	もっとしたい	もう少ししたい	あまりしたくない	したくない	計
小学校(男)	75	48	11	4	138
	54.3%	34.8%	8.0%	2.9%	100.0%
中学校(男)	51	47	17	15	130
	39.2%	36.2%	13.1%	11.5%	100.0%
計	126	95	28	19	268
	47.0%	35.4%	10.4%	7.1%	100.0%

P<0.01

表7-2

	もっとしたい	もう少ししたい	あまりしたくない	したくない	計
小学校(女)	84	50	16	3	153
	54.9%	32.7%	10.5%	2.0%	100.0%
中学校(女)	55	61	8	5	129
	42.6%	47.3%	6.2%	3.9%	100.0%
計	139	111	24	8	282
	49.3%	39.4%	8.5%	2.8%	100.0%

P<0.05

遊びの意欲、欲求に関して、男女、小中学生ともにその意欲は高いことが分かる。また男子の場合には、小中学校でほとんど同じような値となったが、中学校では男子よりも女子のほうが遊びの意欲や欲求はやや高いことが分かる。

また学校種別では、中学校になると、男子のほうが女子よりもその意欲がかなり減少することがみられ、男子では1%レベル、女子は5%レベルで有意差がみられた。

②都鄙間の比較

表8-1

	もっとしたい	もう少ししたい	あまりしたくない	したくない	
地方(小学校)	35	49	15	1	100
	35.0%	49.0%	15.0%	1.0%	100.0%
都市(小学校)	124	49	12	6	191
	64.9%	25.7%	6.3%	3.1%	100.0%
計	159	98	27	7	291
	54.6%	33.7%	9.3%	2.4%	100.0%

P<0.01

表8-2

	もっとしたい	もう少ししたい	あまりしたくない	したくない	計
地方(中学校)	36	48	9	5	98
	36.7%	49.0%	9.2%	5.1%	100.0%
都市(中学校)	70	60	16	15	161
	43.5%	37.3%	9.9%	9.3%	100.0%
計	106	108	25	20	259
	40.9%	41.7%	9.7%	7.7%	100.0%

小学校と中学校の比較をみると、地方ではその意欲はほとんど変わらないが、都市

では「もっとしたい」が64.9%から43.5%と21ポイントほど減少している。

次に、学校種別の都鄙間比較では、小学校では「もっとしたい」が地方の35%、都市64.9%となり、都市の小学生の欲求が非常に高く1%レベルの差となった。中学生でも都市の「もっとしたい」の比率はやや高いが、統計的な差はなかった。

遊びの意欲や欲求では、小中学生の男女ともに、その意欲や欲求は高く、現状に満足していないことが分かる。特に都市の小学生は欲求が高い。前述の平日の外遊びの少なさもその原因の一つと考えられる。

第4章 総括

1. まとめ

本研究では、中国の小学校体育の現状について、制度と子どもの実態という両側面から研究を行った。特に制度に関しては、同じアジアの国であり、歴史的に長い交流のある日本との比較から考察した。

体育政策や指導要領を見る限り、現在の両国の内容はかなりの部分で似ていることが分かった。中国の「課程標準」の制定は、表面上は、子どもを取り巻く現在の中国の状況や将来の発展に資するものである。しかしこの制度と子どもの実態は大きく乖離しており、特に地方の実態は顕著である。現在の中国の学校体育は前よりも飛躍的に改善された。しかしまだまだ改善すべき点が多々ある。課程標準の目標が早く達成されるよう、特に地方の教育環境を改善していく必要がある。

2. 提言

① 中国の政府や学校は体育の教科をより重視し、子どもの「健康が第一」という課程標準の理念や目標を達成できるよう努める。そのためにも現在の受験競争を少しでも緩和させるような政策をとる。

- ② 学校における体育授業では、子ども達に生涯スポーツの理念や考え方を十分に理解させ、それに対応した授業運営を行う。
- ③ 教育における都鄙間の格差をなくす政策を実行する。

3. 本研究の成果と研究の限界

本研究では、中国の小学校体育の制度と、その定着をみるために子ども達の実態を調査するという二側面から分析、考察した。特に実態に関しては都鄙間比較を重視した。このような視点からの研究はほとんどなく、新たな知見を見出したことが成果といえる。

しかし学習指導要領や体育授業の日中比較に関し、筆者の能力および時間不足で、主に中国の文献からの資料を使用したこと、実際の日本の体育授業に関してはほとんど参観していないことは、本研究の限界である。また中国の子どもの実態に関しても、本来であれば日本の子どもとの比較を通し、明らかにすべきだったと考える。

今後、同様の日中比較の研究を行う時には、日本の体育授業を丹念に観察し、また日本の子ども達にも調査を行いたいと考える。

参考文献

- [1] 稽清(2014年), 我が国《義務教育体育と健康課程標準》(小学部分)と日本《小学学習指導要領》(体育篇)的比較研究 揚州大学
- [2] 張 紅岩(2008年), 日中の学校体育における学習形態に関する比較研究——組織的側面に着目して—— 広島大学
- [3] 李水、姜軍(2006年), 中日米三国学校体育的比較研究 平原大学学报
- [4] 包鉄全(2009年), 中日両国学校体育的比較研究 体育文化導刊
- [5] 曾 懷光(2006年), 中日米学校体育教育

- 的比較分析 広東教育学院学報
- [6] 韓 小芹(2014年), 重慶市沙坪区小学《体育と健康課程標準》的实施現状と改進黨略 重慶大学 修士論文
- [7] 段 立新(2014年), 体育教学实施終身体育教育モデル研究 黑竜江科学学報
- [8] 黄 愛弟(2008年), 論学校体育と終身体育的つながる 科教文匯定期刊行物
- [9] 曹 社華(2009年), 中外終身体育教育比較研究 繼續教育研究
- [10] 吳習東(2002年), 終身体育と学校体育、全民健身關係的研究 体育科学研究定期刊行物
- [11] 武 宇林(2006年), 体育課 課外活動終身体育——中日体育觀念と行為比較談 寧夏教育定期刊行物
- [12] 山崎 ゆき子(2014年), ユネスコにおける生涯学習概念の再検討——フランスの教育改革を視野に入れて 神奈川県立国際言語文化アカデミア紀要
- [13] 小林 平造、秦旋(2007年), 現代中国における「学校外教育」の研究 鹿児島大学
- [14] 張文(2012年), 浅析日本学校体育改革对我国学校体育發展的啓示 人文教育
- [15] 李 建軍(2001年), 中国体育と健康課程と日本保健体育課程目標的比較分析 成都体育学院学報
- [16] 肖威、吳 本連(2013年), 義務教育体育と健康課程標準实施策略 体育学刊
- [17] 戴豊(2007年), 日本中小学体育課程的變革と發展 中国学校体育定期刊行物
- [18] 何 衛東、馬軍(2009年), 中国、日本とタイ—中小学体育教学比較研究 山東体育学院学報
- [19] 楊 有生(2007年), 終身体育教育と学校体育 山西管理学院学報
- [20] 劉艷、劉晶(2001年), 終身体育思想卑見 首都体育学院学報
- [21] 賴勇(2014年), 体育教学と終身体育的相關性思考 当代体育科技定期刊行物

- [22]今井 茂樹(2012年), 生涯スポーツを目指す日中体育授業の比較研究——体づくり運動の実践を通して—— 全国研究紀要
- [23]高 力翔、汪容(2002年), 中国と日本現代学校体育発展段階的比較研究(三)——生涯体育と終身体育的相継出現 南京体育学院学報
- [24]三本木 温(2010年), 新しい学習指導要領におけるこれからの体育科のあり方 八戸大学紀要
- [25]趙 金林(2015年), 浅談終身体育教育在我国学校体育中的發展 科技情報定期刊行物
- [26]崔 立根(2010年), 終身体育教育的論理 出発点と發展趨勢 中国成人教育
- [27]高 力翔、汪 曉平(2002年), 中国と日本現代学校体育発展段階的比較研究(二)——両国学校体育的独立發展 南京体育学院学報
- [28]趙好(2007年), 中、米、日学校体育的比較研究 北京体育大学学报
- [29]新しい教育基本法について(2006年) 文部科学省
- [30]張勇、劉全、張銳、胡棋(2002年), 中外学校体育教学内容と大綱的比較と分析 北京体育大学学报
- [31]雛 虹波(2014年), 日本学校体育思想変化分析 体育文化導刊
- [32]喻勇(2002年), 日中両国学校体育的比較研究 チチハル大学学报
- [33]喬 徳旭、林嵐(2008年), 日中両国学校体育思想的比較研究 科苑觀察
- [34]賈 燕妮(2012年), 日本と中国における子どもに生活について——子ども生活実態調査に関する資料に基づいて 筑波大学博士論文
- [35]ベネッセ(2013年) 放課後の生活時間調査—子どもたちの24時間—ダイジェスト版 <http://berd.benesse.jp/shotouchutou/research/detail.php?id=4690>
- [36]ベネッセ(2014年) 小中学生の学びに関する実態調査 速報版 <http://berd.benesse.jp/shotouchutou/research/detail.php?id=4340>